

## 平成 30 年度プロジェクト研究実績報告書

<b>【研究課題】</b>	認知機能検査で第 1・第 2 分類と判定された高齢ドライバーの心理的葛藤
<b>【研究代表者】</b>	成松 玉委 (東京情報大学・講師)
<b>【研究分担者】</b>	大山 一志 (東京情報大学・助教) 宮野 公恵 (東京情報大学・助教) 柏葉 英美 (岩手県立大学・准教授) 堂下 浩 (東京情報大学・教授) 藤井 博英 (東京情報大学・教授)
<b>【研究の目的】</b>	<p>当初の研究目的は、認知機能検査結果において、「認知症のおそれあり (第 1 分類)」又は「認知機能低下のおそれあり (第 2 分類)」と判定された高齢ドライバーを対象に、①高齢者自身の心理葛藤や②運転を危険であると感じながらも止められない戸惑いの実態を明らかにすることであった。しかし、千葉県内の運転免許センター及び教習所において、研究協力を依頼したが何れの施設からもインタビュー調査協力が得られず、目的は達成できなかった。先行研究において、高齢ドライバーの運転特性に関する論文は多く報告されているが、免許返納の意志決定プロセスにおける高齢ドライバーの「後悔」と「悲嘆」についての先行研究は見受けられない。そこで、研究目的は運転免許を返納した高齢ドライバーの意思決定における「後悔」と「悲嘆」の実態を明らかにすることとした。対象者は東北地方 A 県に住む運転免許証を返納した高齢ドライバーで、取消し処分及び家族から勧められて自主返納した 75 歳以上とした。本研究で得られた知見は、高齢ドライバーの免許返納に伴う心理的負荷のサポートを担うための基礎資料とする。</p>
<b>【研究報告】</b>	<p>対象者は男性 3 名である。対象者の平均年齢 84.7 歳 (標準偏差: 4.0) である。分析の結果、4 つのカテゴリが導出された。【過信による抵抗感】、【運の悪さを悔やむ】、【外部の暗黙のプレッシャー】、【生きがいの喪失への危機感】であった。自身の運転技術を過信と捉えている (まだ若い・自信がある) 高齢ドライバーは、メタ認識の歪みの表れと考えられる。更に、モータリゼーション世代として、車との一体感及び車中心とした人生を歩んできた思い入れが他の世代と比べると強いと考えられる高齢ドライバーは、たった一度のドライビングミスで、人に免許返納の是非を指摘されることに、①過敏に反応し、②自身の人生を否定されていると感じ危機感を持つのであろう。特に運転免許証を返納した高齢ドライバーに対しては、個別性・人生史を考慮した配慮のある対応が喫緊の課題である。</p>
<b>【成果の公表】</b>	1. 公開講座 平成 30 年 9 月 10 日 テーマ: 認知症高齢者の安全を支える取り組み
<b>【総評】</b>	<p>認知症高齢者の家族及び認知症高齢者を収容する介護保険施設の職員によれば、運転免許証の自主返納の促進・返納後の高齢ドライバーの苦悩が明らかになったので、今後は専門職者が連携して高齢ドライバーのサポート体制の構築に努めたいとのことであった。</p>